

『地方生活场景』管見 [Ⅱ]

西岡, 範明

<https://doi.org/10.15017/2332585>

出版情報 : 文學研究. 88, pp.127-156, 1991-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

『地方生活场景』管見〔Ⅱ〕

西 岡 範 明

バルザック (Honoré de Balzac, 1799-1850) の文学世界は、地方 (province)、地方小町 (petites villes) の不断の干渉または関与によって意味づけられているところが多いが、その仕方には、時期によって微妙な相違があるように思える。中でも、地方、地方町の本質にかかわる観念の固定化は『地方生活场景 (Scènes de la vie de province) の諸作品を迎れば大よそ解析できる。これに同场景のあとさきの考察を加えれば、バルザックと地方・地方町との関係のより本質的な把握に近づくのではないだろうか。たまたま、その作業に便利な2つの旅小説がある。『ことづけ (Le Message, 1932)』と『人生の門出 (Un Début dans la vie, 1842)』である。まずは当時の旅小説、というより旅行文学の意味から考えてみたい。

19世紀初期から相次いで生じたロマン派、写実派、自然派文学の作家たちが、大なり小なり、旅(行)になじんでいたことは周知のとおりである。彼らはその体験を紀行文、見聞録の体裁にまとめ、さらには小説の題材や背景として創造的に活用した²⁾。彼らの旅は今日のそれとは異なり、移動の過程自体が濃密な内容を持ち、その思考や感情に大きな影響を与え、ときにはそれらを支配するまでになっている。特にロマンチズム全盛期の作家たちは、その開放された過剰なほどの感性、想像力を働かせながら、時速わずかに2,30キロの馬車の鉄輪に身を託し、悪路と戦いながら詩情を養い、場合によっては徒歩で山河を越えてゆくこともあったのである。いわゆる自然美に開眼させられ、地方色

(localités, couleur locale) をもって新しい文学風潮の魅力とした者たちにとって、それは当然の苦役でもあり、同時に愉楽であったはずである。そうした意味で彼らは当代はもちろん今日的にも、質量両面での大旅行者であったといえる。ただフランスの作家たちのほとんどは、都パリを対極とする純自然あるいは異国に走りがちであった。その点彼らの後継者たる写実派、自然派に属する人たちは、彼らの自然趣味、異国趣味のマンネリズム化への批判をばねにしているだけに、都の外への関心は同じであっても、より現実的に、より多角的に観察する立場をとった。その1つの結果として、これまで卑小・凡俗にして小ブルジョワ的なものの典型として無視されてきた地方の小市に、新しいロマン(小説)の発酵槽を見出し、それを誇ったものである。彼らの旅は、感情のそれよりも、むしろ民俗的、地誌的興味の旅に近づいてゆく。パリ人=フランス人にとって、それは自己の中の他者を発見し認知する機会となる。それに対して、田園は過剰な思想性を脱ぎ去り、背景としての役割に落ちつく²⁾。

こうした観点から、『ことづけ』と『人生の門出』の特徴を比較してみると、『地方生活场景』の、バルザック自身及び当代における文学的価値がいっそう明らかになるであろう。

『地方生活场景』シリーズの構想が1833年半ばの頃のこととして、それまでのバルザックは、1829年の『ふくろう党 (Les Chouans)』及び『結婚の生理学 (La Physiologie du mariage)』の作者として名を挙げており、1831年の『あら皮 (La Peau de Chagrin)』によって文壇からの認知を受け、いまやパリ社交界の寵児の1人となっていた。パリならではの軽佻さも身につけた稚気満々の伊達者と批判されもした。もともとツール (Tours) 生まれの田舎者であるのに、生粋のパリ人以上にパリのな振舞いをする人気作家、そうした彼の心的状況からすると、地方町への回帰は、新しい「旅立ち」であったといえる。あくまでもパリを基点とする往復運動であるから、地方 (町) はつねに相対的、劣性的な位置にある。『地方生活场景』が作者の長期、短期を問わぬ「滞在」を意味するとしても、この関係に変わりはない。このことはバルザックの地方小説の

特徴でもあり、また限界でもあったが、『ことづけ』なる旅小説の記述スタイルがそれを端的に示している。

旅行馬車の転覆による1人の青年の死をめぐる『ことづけ』の物語はバルザック自身が類似した体験をしており、しかも結果的にではあるが1人称形式をとっているだけに、各事実・事象に配された記述の質と量の差には、作者の価値判断がかなり働いているとみられよう³⁾。そこで作者の窓外に対する眼を追ってみよう。「私」と「彼」、この2人の若者は1819年（晩夏らしい）、パリ発ムーラン行の乗合馬車に乗りこむ⁴⁾。始発駅がパリのどの辺りなのか、終着駅ムーラン（Moulins）はどの方位で行程は何料か、などについては一切記されない。現実のムーランはパリの南々東280料の地点にあり、今日と同じ道路を辿るとすれば約半日を必要とするし、中小合わせて10ぐらいの町や村落を経由するはずである。これはかなりの道のりであるが、語り手にはそれを読者に実感させようとする気は無い。「私」は「最初の4、5里のあいだ」にもう1人の青年と親しくなり「だんだんに見えてくる田舎（pays）の見事な景色や大気に対するわれわれお互いの愛」などを知って、意気投合する⁵⁾。それから「30里とは行かないうち」に、2人とも38才と40才の、いわゆる中年女を熱愛していることを告白し合い、のろけ話に打ち興じて、馬車がどこを通過しているのか気付かぬようである。話者はその興奮のなかで、モンタルジ（Montargis）の町を通過したことだけを報告している。「モンタルジから、もう名前なんぞ忘れてしまったが、ある駅継場まで」が区切りとなり、ついで2、3の町を一気に駆け抜けたあと、モンタルジから少なくとも10里は先へ行って「プイイ（Pouilly）にそろそろ到着する時分、私は新しい友だちの姿かっこうを注意してしらべた」と言う⁶⁾。モンタルジは現在位置の標示に用いられただけであるが、プイイは舞台背景の役割をも与えられる。つまり「プイイから1里のところで馬車が顛覆」するのである。その下敷きになって瀕死の重傷を負ったかの青年は近くの百姓家にかつぎこまれ、「私」に大事なことづけをする。それは「愛人が書き送った恋文を、ラ・シャリテ・シュール・ロワール（La

Charité-sur-Loire) の彼の邸から受けとり」彼女に直ちに届けてほしいということであった。死者を残して「私」は「ラ・シャリテでこのあわれな旅人の口述の遺言の執行に」あたる。貴重な信書を携え、おそらく馬車でムーランへと急ぐのであるが、その間80軒、ヌヴェールという大町のことも、ひろがる田園のことも全く記述されていない。ムーランで旅費が底をついた話者は、そこから8里、徒歩でブルボネ (Le Bourlonnais) の山野を苦勞しながら辿ってゆく。そして、件の女性ジュリエット・ド・モンベルサン (Juliette de Montpersan) の領地に入るころから、風景、地形の描写がはじまるのである。抒情と叙事がここではじめて調和する。そしてまた、帰路ムーランまで伯爵に送られ、そこでは貴族らしい心遣いで旅費をもらい、一気にパリに戻るのであった。パリの感傷的記述もまた無い。

以上指摘してきたとおり、このロマンチズムの濃厚な掌篇のなかにあって、美しい田園も、その単調さに時おり変化を与え、情動と思考に微妙なアヤをつけてもよい町や村のたたずまいが一切触れられず、ただ道標の役割に徹しているのは異様というほかはない。それらは余計なもののように、あらかじめ「だんだんに見えてくる田舎の景色」で片付けられたものとみてよい。この道は、執筆の少し前にバルザック自身が、年来の恋人であり、モンベルサン夫人のモデルにも擬せられるベルニー夫人 (Mme de Berny) を、同じくムーランに近いバザルヌ (Bazarnes) に訪ねた往復路であったのは確かであるだけに、そうした冷たさは理解しにくい。田園はともかく、これら幾つかの町や村は、実際の個有名称によって、物語の真实性を強める役割を与えられたものか、さらにはヴェネツィア、フィレンツェなどの異国の町が、その名前だけで当代人を魅惑したその想像的効果を期待したためか、と考えられる⁷⁾。たしかに1830年ごろは、国内旅行記も流行しはじめ、考古学、民俗学的な出版物も大いに紙価を高めつつあったから、そうした期待など、必ずしも見当外れとはいえなかったであろう。それにしても、筆者が『ことづけ』に代表させた同時期のバルザックの作品、例えば『あら皮 (La Peau de Chagrin, 1831)』や『ツールの司祭 (Le

Curé de Tours, 1832)』などの小説、またエッセー、論文等において、郷里の町ツールとパリを除くと、群小の町や村が1つのイメージを賦与されたり、活用された例が無いのは示唆的である。

小町というものは、いくつかの慣習を抜きにすれば、どれも似たり寄ったりである⁸⁾。

その点、『ふくろう党』で見たフージェール (Fougères) などのブルターニュの町々が、現代史の舞台として、かなり鮮やかに描き出されているのは対照的ともいえる。彼ら地方の町々は作家の脳裏において文学的失速を起こしたのであるろうか。事実はそうではなく、次の大潮を招く一時的な退潮であったように思える。『ことづけ』発表の翌年すなわち1833年から1843年までの11年間に、『地方生活場景』を主舞台にして13の地方小町がおのおの演目をになって次々と登場するのである。それは、研究者たちが指摘しているように、筋の組立てに必要な限りにおいて、局所的に、また臍げに描かれる場合が多いが、総体としての実在感があって、小説内容に深く関与している。しかも『ふくろう党』の活劇調ではなく、日常の生活調においてである。地誌も民俗もそれによって生き、地方町自体の価値化、多様化をもたらしている。現代の研究者たちの中に、こうした町々の実像、虚像の関係を、バルザックの心理的構造にからめて整理しようとする人たちが現れたのも、そうした事実があるからである⁹⁾。

『ことづけ』から10年後、同じように車中の会話シーンを導入部乃至副中心部とし、その結果が主人公の身に大きく影響する物語、すなわち『人生の門出 (Un Début dans la vie, 1842)』が出現した。この作品は『ことづけ』の15倍の長さを持つ中篇小説であり、内容の濃密さ、複雑さは前者と比すべきもないが、その記述が多量となった理由の1つは、乗合馬車の道すじに点在する町や村についての任意な言及がなされていることにある。60ページ (プレイアド版) の旅行シーンの中で、そうした言及が16箇所にもみられるが、物語冒頭にくりひろげられるパリ近郊交通事情、フォブール=サン=ドニ街にある始発所周辺の、やや冗長ともいえる説明、描写とともに、主題からはみ出た感があり、作品の

体裁、文脈にむしろ負の貢献をしている。しかも、そこにはバルザックの自負、自己主張が覗かれるようである。

すなわち、この作品は妹ロール (Laure Surville) の短篇小説『かっこう馬車の旅 (Le Voyage en coucou)』を下敷にして作られたものであるが、この物語には枝葉的な部分はいっさい無いのである。冒頭の出発シーンを除けば、車中の場面を構成する事項への記述の配分、全記述の総量など、『ことづけ』と著しい相似があって、ロールが兄の旧作を手本としたのではないかと思えるほどである。彼女のかっこう馬車はパリーヴィルパリジ (Villeparisis) 間の約15軒しか走らぬ短距離便である。終点のヴィルパリジと、主人公たちが下車する駅クレイ (Claye) が名前だけの登場をする。また沿道への関心は、出発してまもなく見えてくるショーモン (Chaumont) とロマンヴィル (Romainville) の丘の美観に向けられるだけである¹⁰⁾。バルザックは、この馬車をパリーリラダン (L'Isle-Adam) 間、約50軒の便に変え、主人公たちは終点近くまで運ばれる。リラダンもヴィルパリジも少・青年期のバルザックには馴染の深い土地であったし、周辺の地理にも通じていたわけで、その路線変更には特別の理由は見出せない。もし有るとすれば、このパリ北西への街道が要港ル・アーヴルに通じ、産業の急激な発達とともに交通量を高め、周辺を賑わせるに至った、ということであろう。バルザックは、特にパリーリラダン間の交通網を旅物語の背景に置きたかったようである。当然ながら、線でつながれる点、つまり散在する町や村が、名称だけでも浮かび上がってくる。

…それほどにもサン・ドニ、サン・プリスというような小さな町 (de petites villes) やピエルフット、グロスレイ、エクアン、ボンセル、モワッセル、バイエ、モンスー、マフリエ、フランコンヴィル、プレール、ノワンテル、ネルヴィルなどという村々 (des villages) をつなぐこの線はもうけが多いのである。…

…ツシャール通運はとうとうその線をパリからシャンブリまで延ばした。だが…こんにちではツールズ社ではボーヴェまで行っている¹¹⁾。

さらに筆は弾んで他の町村名が続くが、大多数の読者にとって、正に無意味な

文字の連なりであろう。過ぎたるは及ばざる如しである。それを承知で敢て列挙し続けたのは、『地方生活場景』を中心にした10年間の執筆で、バルザックが身につけた習癖であり、また1種の使命感に由るのもであろう。云いかえれば、記録者兼小説家バルザックの町々、村々に対する優しい眼である。次の文章もそうした現われであろう。

…オワーズ河流域でも最も風光明媚な谷地の1つの中にあり、現在では後の絶えているリラダン家発祥の地として、またブルボン家の支脈であるコンチ家の旧住所として、2重に有名なリラダンという小さな町に (la petite ville) に達する道がある。リラダンは、ノジャンというのとバルマンというのとの2つの村 (deux gros villages) に接続されている、感じのよい小都市であるが、この2つの村はいずれも、現代パリや外国の、最も美しい建築物の材料を供給したという壮大な石切場で名高い村である…¹²⁾。

また道行の段になると、先述の如く、道沿いの町や村が『ことづけ』とは違って、その形姿を伴い、乗客多数の会話の合間を縫うように、記述される。例えば、

…サン・プリスからボンセルへゆく道の中ほどで、…エクアンやメニールの鐘楼やすばらしい景色を圍繞する森などに対する眺望のよくきく峠道にやっとさしかかったところ、…¹³⁾

といった文章の類がところどころに挟みこまれている。さらには、2箇所の駅場では休憩の時間を設け、旅客には土地の名物を食べさせたり、宿屋の亭主と地元百姓の会話をじっくりと聞かせたりするのである。

『人生の門出』は、タイトルの示すとおり1人の若者の社会初体験の物語であり、世間知らずで軽薄な少年が、はじめて乗った田舎行の乗合馬車の中で、旅人同士が交わす無責任なほら話に引きこまれ、見栄を張って取り返しのつかぬ失言をし、そのため恩人を失職させ、母親を絶望させ、おのが一生を狂わせる、という筋になっている。従って『ことづけ』と同様、車中の会話の流れと、後半の到着地つまりセリジ伯 (le comte de Sérisy) の邸内のシーンが主要部な

のである。而も、この作品は『ことづけ』とは違って、当初からためらうことなく『私生活場景 (Scènes de la vie privée)』に組入れられていて、風俗、地誌的要素を必要としなかったものである¹⁴⁾。しかし『人間喜劇』全体の有機的連関を可能にするための手段の1つと云えなくもない。それは『幻滅』第3部と照合したとき感じとれるのである。

『人生の門出』よりも早く構想され、完成はそれより1年遅れた『幻滅 (Illusions perdues)』第3部 (1843) も1種の旅物語であるが、主人公の青年リュシアン (Lucien de Lubempré) は、パリからアングレーム (Angoulême) を1人旅、復路はエレラ師すなわちヴォートラン (Carlos Herrera = Vautrin) との2人旅をする。この『地方生活場景』掉尾の作において、その最後の花道をゆく感のある場面は、ほとんど道具立てがなされていない。450軒の長旅は地獄への幽暗の道行の感がある。己れの軽薄さのため妹夫婦を苦境におとし入れたあとという点、『人生の門出』と順序が逆で、しかも自殺未遂の主人公は周囲の情景など目に入れるわけもなく、また相手のエレラ師は目の餌物に全身を集中させている悪魔であるから、外界無視の記述はむしろ自然な技法かもしれない。それでもバルザックの道筋への気配りが無いでもないのである。

スペイン僧侶は本当に思いやりふかい人物らしく思えたので、詩人はためらわずに本心をうちあげた。アングレームからリュフェック (Ruffec) までのあいだに、おかしな過失なに1つかくさず、これまでの身の上を語り、…ちょうどそのころ、街道筋のリュフェックの近くにあるラスチニャック家の地点にさしかかっていた¹⁵⁾。人口僅か3千程度の小村リュフェックは、ヴォートランが曾て愛したラスチニャック (Eugène de Rastignac [『ゴリオ爺さん (Le Père Goriot, 1835)』の主人公]) の実家が近かったというだけで道標の代わりとなり、作者はわざわざ彼らを下ろし、ヴォートラン思い入れの場を作ってやるのである。それから『ことづけ』式の手法が戻ってくる。

…リュシアンはある宿駅 (une poste) に馬車がとまるのを見ながら、こういった。…¹⁶⁾

…もうリュフェックを過ぎて2つ目の宿駅 (le second relais) にきていたから
だ…¹⁷⁾

余りに素気ない記述法ではあるが、それだけにリュフェックの突出は暗示的であり、運命的である。それは『ことづけ』のモンタルジなどとは比較にならぬ重味を持つ。思えば、『地方生活場景』は乗合馬車のシーン（『ことづけ』）に始まり、同じく乗合馬車のシーン（『幻滅』）で終わりを告げたようなものであるが¹⁸⁾、それは作者自身のパリ→地方→パリといった長い旅路を象徴し、いわば円環の完成、というより周縁から中心への帰還の径路を示す。そして未知の町モンタルジに始まって、有縁の町（村）リュフェックで終る。しかもラスチニャックは『人間喜劇』全体をつなぐ再登場人物の第1号であった。『ゴリオ爺さん』以来10年近くつき合った作中人物が往復した道は、もはや記録するまでもない。『幻滅』第3部の序文においてバルザックは、この巻で『地方生活場景』はほぼ完結したよう口吻をしている¹⁹⁾。それまでこの場景に登場させた地方町は高々7町に過ぎなかったが、些か長くつき合い過ぎたという思いが感じとられる。熱意の最後の火花が『人生の門出』あたりではなかったろうか。

『ふくろう党』いやそれ以前の長い習作時代からの過剰なほどの地方に対する意識が邪魔するまでになった、ともいえそうである。再び町々は等質化し、満天の星々のように遠くなってゆく。文学的趣味の薄れた地方町に変わって、経済的、政治的な意味で書き落とせない町々が残る。そしてそれらは完成しても、『地方生活場景』に入ることはなかったのである²⁰⁾。

バルザックが地方町を離れていったあと、彼の方法に範を求めつつ、さらに新しい文学的価値を付託し、新世代の青年作家たちが地方町を発掘するようになる。つまりリアリストや自然派とかいった連中である。それはバルザックが負と見たものをプラスに変換する作業であった。それはあくまでバルザックが定着させた観念に基づいている。その観念とはどのようなものであろうか。

バルザックに私淑し、地方町こそ小説であるとみたリアリズムの旗頭シャン

フルーリ (Champfleury, 1821-1889) は、『デルテイエ教授の苦悩 (1857)』の舞台に故郷の町ラーン (Laon) を選んだが、この町をいわゆる地方町の典型として捉え、作品冒頭に実態を概括する。

ラーンは人口6千の小市 (petite ville) で、つまらぬことでも騒ぎになる。些細な事件、1月間立ち寄って興行する役者一座、サーカス、人形芝居で、この貧弱な役所、所在地の連中は度外れに熱狂する。

…小高い山上の台地に建てられたこの町は、恐るべき攻囲を物ともしないが、乗物の類が市壁の中に入ってくるのも拒む状態である²¹⁾。

従って人口増加もなく、産業も発展せず、有力者といつては、精々お役人たちだけである。

知事、収入役、税務署長、6人の公証人、同人数の代訴人、半ダースの弁護士、司祭さん、それにめったに出会うことのない4、5人の貴族がた、そういう人たちをラーンから取り除いてみたまえ、あとは小商人の群、年俸1500フランの事務職員たち、2千フランの年金で生活する2百人の町人 (bourgeois) くらいものだ。要するに、習慣に甘んじ、娯楽はつつましく、善行も悪行もせぬ連中だ²²⁾。

そうした町だから、夜10時半にはカフェも閉まるし、その時刻をすぎて街中で人に出会おうものなら、いががわしい人間ときめつけられる惧れがある。大都市の住民には住むに堪えない別世界であろう。

ラーンに足をとめた旅人 (l'étranger) は、町を両断する大通りを端から端へ、15分たらずで歩きついたあと、ひどい倦怠にとりつかれるのである。

その退屈きわまる環境を意識している町びとは「散歩路 (les promenades)」に行ったら、とすすめる。たしかに「この土地 (pays) は美しいし、田園は豊かで、ひろびろとした見晴らし」である。つまるところ、住民の誇りを支えるのは周囲の自然の美である。

シャンフルーリは簡明なリアリズムによってラーン、ひいてはフランスの地方町一般を描いてみせたわけであるが、バルザックが選んだ町々が正にそうしたイメージで出来ており、特に『いなかミュージズ (La Muse du département,

1843)』のサンセール (Sancerre) には、上掲の文がほとんど当てはまる。『幻滅』のアングレームは大型化したものと思えばよい。そして、これらの町々の型は2人の嗜好を示すものではなく、少なくとも今世紀初頭までは普遍的な型として認識されていたのである。いまや古典に属する辞書ともいふべき『リトレ大辞典』では、町 (ville) の第一義として次のような記述がなされている。

① *Assemblage d'un grand nombre de maisons disposées par rues, souvent entourés de murs d'enceinte, de remparts, de fossés*²³⁾. (イタリックは筆者)

本来、外寇に対する防壁であったものが、近世に至って逆に文明の浸透を阻み、内から外への伸張の障害ともなった町々、広大で肥沃な田野がとり包んでいるがゆえに、いっそう狭小で不毛で、自ら好んで孤立しているかにみえる町々が今でも存在する。街道をゆく旅人には、まず屹立する教会の塔や旧領主たちの城塔が見えはじめ、そこに町または村があることを知る。そして外郭を突き抜けると、膨脹の機会を永遠に忘れた核のような中心区 (centre-ville) にゆきつく。バルザックの脳裏にはこうした地方町が原風景としてあり、地方生活の本質的形態もそこにあると確信したようである。『地方生活場景』の諸舞台は、現実の城壁の有無にかかわらず、そのような特質を持っている。それは都会あるいは都市とも、田園とも異質の存在であった。シャンフルーリが用いた *une petite ville* (小町) という語が似つかわしい存在である²⁴⁾。バルザックは意外なほど細かい神経をもって、都会、小町、田園を使いわけている。村らしい村は『田園生活場景 (Scènes de la vie de campagne)』に、大・中の都市は『私生活場景』に組入れられた²⁵⁾。『地方生活場景』の町々はすべて *petites villes* である。

バルザックがまずそうした先入観の中で語り、フランスの読者も容易に受け入れる心理的な素地があるゆえに、『地方生活場景』の意味が成立ったのであろう。しかし、それぞれの町の規模には少なからず差異がある。その差異を感じさせないのはバルザックの描法の然らしめところかもしれない。よく指摘されるように、町中を描くに当って、彼の記述は図形学的ではない。敢ていえば

印象派的である。例えば『老嬢 (La vieille Fille, 1837)』でコルモン嬢 (Mlle Cormon) の屋敷の外を、『骨董室 (Le Cabinet des Antiques (1839)』ではデクリヨン侯爵 (Le marquis d'Esgrignon) の館のある上町を頭に納めた読者は、それでアランソンの町全体を知ったような錯覚に陥いる。『ツールの司祭 (La Curé de Tours, 1832-1843)』や『ラ・ラブイユーズ (La Rabouilleuse, 1841-1842)』のツールやイスーダンにしても同様である。町全体は大まかに描かれるか、ほとんど描かれぬかであり、数字的表示は皆無に近い。これは、日常生活ではもちろん、論文等において、微笑ましいほど数字にこだわるバルザックと、小説作家の彼との違いを思い知らされるものである²⁶⁾。これら『地方生活场景』の町々の実際の規模はどれほどに差があるのか、当時の人口を基に検討してみると、

- ①ツール (Tours) [『ツールの司祭』『ゴージェイサール』] 2万2千~2万3千 (人)
- ②アングレーム (Angoulême) [『幻滅』] 2万~2万2千 (人)
- ③アランソン (Alençon) [『老嬢』『骨董室』] 1万~1万3千 (人)
- ④ソミュール (Saumur) [『ウジェニー・グランデ』] 1万~1万1千 (人)
- ⑤イスーダン (Issoudun) [『ラ・ラブイユーズ』] 1万~1万1千 (人)
- ⑥プロヴァン (Provins) [『ピエレット』] 5千~6千 (人)
- ⑦ヌムール (Nemours) [『ユルシュール・ミルーエ』] 3千 (人)
- ⑧サンセル (Sancerre) [『いなかミュージック』] 2千5百 (人)

一瞥してわかるように、最大と最小の間には約10倍といった人口差がある。プロヴァン、ヌムール、サンセルなど1万に遠く及ばず、日本人の感覚からすれば、町 (ville) というより村 (village) であり、その限りではツールなどとはイメージが大いに異なってくるであろう。しかしバルザックはそれらすべてを ville と呼び、等格的に扱っているのである。また『19世紀ラールス大辞典』も以上の所をすべて ville de France としている²⁸⁾。いずれも県庁、郡庁の所在地であり、周辺地帯の行政中心地ということによるのであろうが、やはり

全体的イメージとして、シャンフルーリの記述した特徴を備えている所といえる。同辞典が「田舎人 (provinciaux) が口にする素朴な格言 (réflexion)」として採録した次のような文句が当代フランス人にもバルザックにも共感されていたであろう。

Les maisons empêchent de voir la ville²⁹⁾.

(家のおかげで町が見えない)

この ville はパリを指すという。おそらく家が多過ぎ、また高すぎて、町全体が見通せぬ、町の象徴たる何物かがすぐには見えぬ、といった意味のようで、地方人にとって町らしい町とは petite ville であったのであろう。それゆえ、大小の差はあっても、その景観が示すように、1つのまとまりを持ち、生活感覚、風俗、伝統を共にする集団ということになろう。それでこそ、バルザックがひんぱんに使用する ville という喚喩または喚称が生きるわけである。バルザック自身がそうした地方人の心理をよく認識していたこと、それは彼の幼、少年期のツール及びヴァンドームにおける体験と追憶、さらには青年時代の初期に重ねた旅行がつねに小町や村々であったためであろう、ということは先稿で論じた。その町や村についてももう少し補言してみよう。

バルザックが幼少年期をすごした学院の所在地ヴァンドーム (Vendôme) は人口約6千の ville であったが、牢獄のような寄宿舎にとじこめられた身には、壁外の町は無きにひとしかった。ツールからパリへ移って最初の旅らしい旅は1817年のリラダン行であり、以後3回往復し、こよなく愛したこの地を『人生の門出』の終点にしたことは既述のとおりである。リラダンの当時の人口は不明だが、今日でも5千ぐらいの村と思われる。1820年から22年にかけて、父の家のあるヴィルパリジとパリの間を往復、そのヴィルパリジも今日約1万強の Commune となっている。1822年に訪れた妹夫婦の赴任先バイユー (Bayeux) からシェルブールへと旅する。それぞれ8千、2万5千程度の ville de France である。1823年にはツール近くヴーヴレー (Vouvray) にあるサヴァリ氏 (M. Savary) の所有地とサッシュェ (Saché) のマルゴンヌ氏 (M. Margonne) 邸に滞

在、以後サッシュェは彼の休息所とも仕事場ともなったが、これらは人口的には取るに足らぬ村であり、ヴーヴレーが主舞台であった『ゴードィサル (L' Illustre Gaudissart)』を研究者たちはツールの物語としているくらいである。1825年は妹夫婦の友人ダブランテス夫人 (La duchesse d' Ablantès) のいるヴェルサイユに遊び、以後同地の妹の家に滞在することが多かった。ルイ大王の宮廷を中心に盛え、革命直前には7万の人口を誇った大都市も、王家の流竄とともに衰え、1831年でも3万を数えるのみであったという³⁰⁾。同じ1825年、印刷関係の商談のためアランソンに滞在。翌年は、同じく商用でランス (Reims) に行った³¹⁾。そして1828年のフジュール行は『ふくろう党』のための取材旅行として余りにも有名である。この町の人口は8千、いち早く地方城塞町の典型として登場した。1829年ヌムール近くのラ・プロニエール (La Bouleauinière) に仮住まいする愛人ベルニー夫人 (Mme de Berny) を訪ね、その後1832年までには5度、長短織りまぜての滞在をしている。同じ1829年秋にはマフリエ (Maffliers: リラダン近くの村) 滞在、1830年は、バルザックの文学と人生とに最も大きな影響を残したと思われるベルニー夫人とのロワール河旅行あり、おそらくソミュールを経て、ル・クロワジック (Le Croisic) にまで行ったが、この人口2千程度の小港町は、のちに『ベアトリックス (Béatrix, 1839)』の脇舞台となる。翌1831年来、バルザックが敬愛し、その終生の良き助言者となったズルマ＝カロー (Zulma Carraud) が夫とともに住むアングレームにはじめて滞在し、翌年夏の2度目の訪問のあと、同地からリモージュ (Limoges)、リヨン (Lyon) 経由で、エクス＝レ＝バン (Aix-les-Bains) にカストリー夫人 (La marquise de Castrie) と合流している。その際、人口4万程度のリモージュでは馬車乗換えのため4時間留まったが、大都市リヨンでは時を移さず出発している。しかもそこに至る途中、馬車軸に脚をひっかけ、深い裂傷を負っていたから、この大都市を観察する気にはなれなかったであろう。そしてエクス＝レ＝バンの小町 (人口3千) に辿りついたのである。リモージュはのちに『村の司祭 (Le Curé de village, 1839)』の舞台となり、エクス＝レ＝バンは

『あら皮』に東の間舞台を貸す。カストリー夫人につれなくされ、ひとり帰途についた彼はアヌシー (Annecy) に泊っている。アヌシーは人口8千の県庁所在地である。1833年はバルザックにとって後半生を決定する重要な旅をした。それは最後の愛人でついには死に際の伴侶となったハンスカ夫人 (Mme Hanska) に初見参の旅であり、行先はスイスのヌーシャテル (Neuchatel) で、その往復路にブザンソンに逗留している。ブザンソンは人口4万、スタンダールが『赤と黒 (Le Rouge et le Noir, 1830)』で、地方町の偏狭さ、狡猾さ、醜さを描いてみせた町である。バルザックは恐るべきエゴイストの娘を配して『アルペール＝サヴァリユス (Albert Savarus, 1842)』の舞台とする。

以上が『地方生活場景』シリーズ開始までにバルザックがおこなった旅行と、その因縁を結んだ町々である³²⁾。その町々のほとんどが彼の故郷ツールと同規模か、それ以下であることがはっきりしている。そして『ことづけ』では流し目でみられた地方町も、同じ時期に書かれ、同じく最初は『地方生活場景』に組みこまれていた小品『捨てられた女 (La Femme abandonnée, 1832)』のバイユーで描写の榮に浴するが、早くも当代地方風俗の描写と批判の色合いが濃いことも注目をひく。改めて地方発見の旅に赴くまでもなく、バルザックの脳裏には、ほとんど決定的なイメージが出来上っていたと見てよい³³⁾。

これに対して、ル・アーヴル、ボルドー、そして遂に舞台とはなり得なかったリヨン、マルセイユ、グルノーブルなどの大・中都市は、1835年以降バルザックを駆りたてた外国旅行の主要な仮泊地か乗継点でしかなかった。それらは彼にとって「地方」ではなかったであろう。例えば『モデスト＝ミニョン (Modeste Mignon, 1844)』のテーマが、パリ人士対地方女性という点で、『地方生活場景』にふさわしいにもかかわらず、『私生活場景』に属したのは、ル＝アーヴルの町に対するバルザックの評価によるところが大きいと思われる。1843年11月、ハンスカ夫人を訪ねてのペテルブルグ旅行から帰って1週間もたたぬうちに、かの地で船便にした荷物を受取りに行ったのであるが、数ヶ月前、『地方生活場景』に港町の物語を入れたいと発言していた彼には、その実情を

検分する絶好の機会であったにもかかわらず、わずかに足掛け3日の旅に終わっている。人口7万の中都会は「地方」の枠には不適であったか。それに、長旅の疲れと旅行中に再発した脳膜炎の苦痛で、市内見学どころではなかったともいえる。奇しくもリヨンと似た運命であった³⁴⁾。翌年『モDESTO=ミニヨン』で描かれたル=アーヴルは、ミニヨン家の立つアングーヴィル(Angouville)の丘から眺められた形、それに教会や二三のサロンを見せるだけで、典型的あるいは小パリの印象を受ける。スタンダールがこの町を地方小町とは別格とし、珍らしく賞賛したのも、このパリの現代性にあった³⁵⁾。N・モゼが「バルザックの地方小説の中で最も地方らしからぬ小説」と断じたのも、こうした意味においてである³⁶⁾。あらゆる点からみて、この作品は『私生活場景』的といえるであろう³⁷⁾。

『結婚契約 (Le Contrat du mariage, 1835)』の舞台ボルドー (Bordeaux) にいたっては、ただ名ばかりであって、登場人物の住む通りの名も特徴もわからぬままである。その概観さえ述べられていない。その前半では、この町が地方 (province) の町であることを頻りに強調し、主人公たちの行動についての町びと (それも上流階級に限られる) の地方的反応を語ってはいるが、テーマとなる夫婦財産契約をめぐる紛争などはボルドーその他地方町に特に顕著な現象でもない。結局、ル=アーヴルもボルドーもそれほど物語の本質と関わりはなく、かといって地方風俗の一典型ともなり得なかったのである。

プロヴァンス (provençe) 出身のバルザック研究者B・ギュイヨンは、愛郷心がはたらいてか、リヨン、マルセイユ、ツールーズ、モンペリエなどの町についてバルザックが一切触れていないことを指摘し、完全主義のバルザックにしては少々お粗末と不満を述べているが、こうした欠落の理由も、1つには以上のようなバルザックの先入観からであろう。彼にとってギョイヨンが言うほど「当時の町々 (villes) は甚だ田園的 (campagnardes) であった」のではなく、いわゆる都会的な都市も多かったのである、特に南フランスにおいては³⁸⁾。

『地方生活場景』を書きすすむにつれて、地方町にかかわるバルザックの暗い固定観念が強くなる一方であったことは先稿で述べた。それは、なによりも住民たちの因循さ、文学芸術に対する度し難い無知無覚を思い知らされることが多かったからである。それは『地方生活場景』の諸作品に強く表われているが、小説というものの性格上、作者バルザックの生のままの関わり方は不透明にならざるを得ない部分がある。同場景が厳酷な作風を呈しはじめる1840年ごろは、彼の本音はどうだったのであろうか。

同年に刊行されたウルリアック (Edouard Ourliac, 1813-1848) の作品『コリネ (Collinet)』の内容紹介と批評で、田舎まわりの俳優と清純な美少女の恋が「町中の下劣な冷かし好きな連中 (les ignobles railleurs de la petite ville)」の餌食となったことをまず告げ、一般論として次のように締めくくっている。

田舎者たち (les provinciaux) が、かくも残酷で、卑怯で、度しがたく馬鹿である自分を見せたのに対し、偉大なる芸術家たるもの、伶俐で、瀟洒で、優しいところを見せるべきであったろう³⁹⁾。

そして、芸術家に対するこの地方町の冷酷さを、バルザック自身が翌々年『ラブイユーズ』第2部で劇的に展開させた。もはやバルザックの本音は丸見えというしかないであろう。

それは『田舎医者 (Le Médecin de campagne, 1833)』から『谷間の百合 (Le Lys dans la vallée, 1836)』を経て『農民 (Les Paysans, 1844, 未完)』に至る『田園生活場景』の田舎人 (campagnards または paysans) の像が次第に暗くなっていったことと無縁ではないかもしれない。ロマンチズムから脱却し、「社会の実相」を表現することを志した彼には、理想を失った、実利主義の七月王政が、全地方にはびこらせた悪を誰よりも鋭敏に見抜いたからであろう。

それにもかかわらず、バルザックは地方町を描き続ける。それは『人間喜劇』完成という自らに課した使命に忠実だったためでもあるが、やはり地方町に対する特別な思い入れがあったため、ともみられる。

『地方生活場景』後半に濃いマイナス的的地方像は、人間共通の先験的価値規準はさておき、当時の読者の多くはキリスト教的、あるいは前世紀までの良きブルジョワの道徳律、そして滅びゆく貴族的崇高性への哀惜の念を多かれ少なかれ保持していたから、バルザックの作品は忌わしく思われたか、というと、そうでもなかった。彼の地方小説が地方人によく読まれることは、当時から文学界の話題であり、謎とされていたようであるが、ジョルジュ＝サンド (George Sand, 1804-1876) はその謎をといてみせた。彼女はフロベール (Gustave Flaubert, 1821-1880) の『ボヴァリー夫人 (Madame Bovary, 1857)』を、それとつねに比較されるバルザックの『地方生活場景』と併せて論じ「彼 (バルザック) は現実の精力的でかつ辛気な描画のなかにも、愛すべき人物あるいは甘美な状景を挟みこむという欲求をみずから禁じ得なかった。」という⁴⁰⁾。われわれも実感するところで、バルザックが地方で読み続けられてきた最大の理由はそこにあろう。サンド自身がバルザック同様「地方に対する深い嫌悪の念 (profond dégoût pour la province)」を抱いていたにもかかわらず、その著作も作者自身も地方人に愛された理由でもある⁴¹⁾。彼らの胸底には抜くべからざる地方への愛情があったからこそ、ともいえる。そして、感情の豊かな者ほど愛情は交錯し振幅も烈しい。バルザックのサント＝ブーヴ (Sainte-Beuve, 1804-1869) に対する執拗な敵意と、スタンダールへの、思慕にも近い敬意とは、このはげしい感情力の対象が二極にわかれた例である。相手が町という複合体である場合、好悪は同一対象に同時にはたらき、その電圧の差が原動力となり、ドラマを作り出す。彼がつとに愛して来たパリでの友人たち、ズルマ＝カロー (Zulma Carraud) ボルジェ (Auguste Borget, イスーダン出身) ルニョー (Emile Regnault, サンセール出身)、サンドらがベリー地方出身であったことと、この地方の代表的な町であるイスーダンやサンセールが全体的に冷眼視されたのは、決して矛盾ではない。彼ら友人の中にあるイスーダンやサンセールが、彼の中にある故郷ツールと同様、親和力を与えるからである。

「バルザックの地方小説は地方人に好んで読まれ、スタンダールのそれは毛嫌いされる理由」が、一昔まえ研究家たちの間で論議されたことがある⁴²⁾。モゼはその1つの答えとして、1833年10月、1人の読者が作家にあてた書簡を引用し、「旅行案内記の類が、その地の日常生活の枠組みに対して、どちらかといえばお世辞を弄したがった時代に、バルザックははじめて、あたかもバビロン発掘でもするかのような厳密さをもって、フジュール、アングレームまたはイスーダンについて語った」ことにあると説明した⁴³⁾。当時勃興しつつあった考古学、民俗学の趣味にかなったというのである。今日の小説の読者たちにも共通した現象で、正鵠を得た意見であるが、それとともに、バルザックは郷里ツールの町を愛し抜き、スタンダールは郷里グルノーブルの町を嫌い抜いたという事実が示す両者の根本的気質の相違があるであろう。さらには、バルザックの経世家的野心にも原因を見ることができるようである。それが、小説世界の構築第一歩のときから、地方町に対してつねに眼を向け、心くばりをさせる結果となった。これには、先述の頻繁な地方旅行、パリでの地方出身者たちとの親交も無関係ではない。

1830年のいわゆる七月革命は、バルザックと同世代の若き文学者たちを、政治の舞台へと駆りたてた。ユゴー (Victor Hugo, 1801-1885)、シュー (Eugène Sue, 1804-1857) などその好例である。さて7月革命の最中、バルザックはベルニー夫人同伴でロワール河の旅にあったが、9月パリに戻るや、ただちに『パリ書簡 (Lettres sur Paris)』の執筆にかかり、翌年3月末までに19回《Le Voleur》紙に掲載した。この新政府の政治、外交策についての批判、それにかかわる首都パリの動向のレポートは、新選挙法に基づく次の総選挙を睨んでのいわば早手まわしな政見発表と見てよい。この「書簡」が地方人向けであることは明らかであり、時には地方の政治的後進性を衝きながら、多くの場合、地方擁護または激励の檄文となっていることは留意すべきであろう。例えば、

予見に富む人々は（来るべき議会召集について）諸県（départements）とパリの間の相剋の前兆を、今日早くも認識している。どちらが勝つか、いうまでもない。

あなた方は、なにゆえに地方（province）がとるに足らぬか、ということをし、われわれよりよくご存知だ。それは…（略）…あなた方が住民の滓（caput mortuum、つまり質の悪い議員たち）を送ってよこすからだ…⁴⁴⁾

といった、パリ人の地方批判とも、地方人のパリ派遣員が発する警告とも取れる箇所が目につく。しかもこれらの「書簡」は、奇妙なことにある特定の（例えばツールの）人物にあてるといふ形をとっていない。それらは架空名、実名とりませ、いろんな町々の在住者あてとなっている。第1、第2、第5、第11の「書簡」はツールの連中へ、他はアルジャンタン（Argentan）、シャテルロー（Châtellerauld）、ヴィトレ（Vitré）、ニーム（Nîmes）、オルレアン（Orléans）、モンタルジ、ナンジ（Nangis）、ルーアン（Rouen）、ナント（Nantes）、ブザンソン、シャチヨン（Chatillon）、サン＝カンタン（Saint-Quentin）、カンブレー（Cambrai）〔2通〕、シャルトル（Chartres）、バイユーの在住者あてである。いづれをとっても地方の中では小規模な町か村である。ギュイヨンもこのことに注目し、「これはジャーナリストとして、真実に渴えている地方人たちの用に供するため（à l'usage des provinciaux avides de vérité）」とし、読者と折り合いをつけること、読者の神経を傷つけてはならぬことを心得ていたためだと解釈しているが、それには政治的な意味がこもっているとみるべきであろう⁴⁵⁾。

それから1月たらずのうちに、同じく《Le Voleur》紙に予告したうえでバルザックは『二つの内閣の政策に関する調査（Enquête sur la politique des deux ministères, 1831, 4, 25）』という正式な政見パンフレットを出す。それを武器として狙った立候補地が、カンブレー、フジュール、ツールの選挙区であった。いづれも地元の友人、知人をあてにしてである⁴⁶⁾。さらに『地方生活場景』の構想が芽生えはじめたころ、1832年5月、ツール近くのシノン（Chinon）から、これも地元の名門貴族や、大地主マルゴンヌ氏の後楯を得て、

衆議院補欠選挙に立候補するが再び失敗する。以後もバルザックの政治的野心は消えないけれども、地方町を利用することはあきらめたようである。1848年二月革命直後の立法議会選挙では、パリの知人たちの後楯で、はじめてパリから出馬した。

ともあれ、1831、1832年の選挙運動の経緯は、それまで彼が抱いてきた地方人像のマイナス面を強め、プラスの面（少なくとも自分に有利な）を弱めたこと、それがかえって、甘い流行兎の殻を破って、リアリスト的創作意欲に火をともしたといえる。彼の省察の対象は地方町の住民一般だけでなく、その中にある地方人意識に悩む者の心理、それに自己の同一性の問題であった。彼も地方町をそれほど甘く見ていたのではないが、知人たちのぶつかった壁は予想以上に固かったようで、その苦渋はバルザックにはね返ってきた。彼が最も期待をよせたツールの友人フォシュュー（Amédée Faucheu）は、

…あなたもはっきりと判断されたように、（このような）地方はすべて地元の名士（célébrités locales）とかいった人たちには冷淡で、ねたまっぼくさえあります。そこに籍をおこう（se naturaliser）とする人に対しても、です。^{47）}

と、冷水を頭から浴びせるような報告をしているし、フジュールのポムルール氏（le baron de Pommereul）も、バルザックの政見が地元（esprit）にそぐわぬこと、当地の政争の腥さ、それと一般大衆の政治についての無知ぶりを述べ、

彼らは地元（esprit）の人間しか望みません。数年前、ル＝グラヴラン氏を指名しようとしたことがあります。この人がブルターニュ人で、相応の肩書があったにもかかわらず、レンヌ選挙区所属というだけで成功しませんでした。

と嘆いている^{48）}。彼らには、いまや地元にも人気の出はじめた流行作家を友人に持つという誇りがあっただけに、今度は自分がその劣等な地方町の一員ということで、無意識に自己卑下を生む。

…物忘れのひどいパリ生活のただ中であって、小生のことを記憶しておられたことを感謝します。田舎（province）に住む小生にとって…^{49）}

…新聞もない田舎者 (campagnard) など魂の抜けた体のようなものと、あんたは感
じたらう…⁵⁰⁾

…ここには、これといった人物もありはしませんが、絵のような景色だけは御覧に
なれましょう、それにここはスイス街道筋に当っており、スイスは貴方の筆に価す
る美しい国です。貴方をお迎えてきて格別にうれしく思う人間が1人はいるという
こと、申しあげるまでもありません⁵¹⁾。

これらの書信に彼らの住む町の現在を誇ったものではなく、精々豊富な古えの
遺跡か、さもなければ周辺の山河、田園の美を自慢するぐらいである。こうし
た地方人の心理的反応を以前バルザックが経験乃至見聞したかどうかはわから
ないが、今回のそれは直接彼自身が関与しているだけに、深く脳裏に刻みこま
れたと思われる。このような屈折した地方人の心理状態は『地方生活場景』に
おいて幾つかの人物像を形成するのに役立ったし、類似した形態の選挙話が
『アルベール＝サヴァリユス (Albert Savarus, 1842)』や『アルシの代議士
(Le Député d'Arcis, 1847)』で展開されるに至った。

同じ時期、同じ選挙からんで、バルザックと地方を結びつけ、その地方に
ついての認識を決定づけたのは、ズルマ＝カローの存在であろう。七月革命
で左遷され、サン＝シール陸軍士官学校教官からアングレームの火薬庫所長に
なった夫にしたがって都落ちした彼女は、故郷のフラペール (Frapesle, イ
スーダンの郊外) に一旦落ちつき、ついでアングレーム郊外の官舎に入るが、
切々たる追放 (exil) の哀歌をバルザックに送り続ける。田園との再会だけを
楽しみとし、そのかわり、田舎女 (provinciale) になり下ってしまう不安にお
びえているのである⁵²⁾。その彼女がアングレームに安住し、次第に地方在住者
の誇りと自己卑下を織りまぜながら、地方町の実態を教示するようになる。そ
れもバルザックの選挙運動を契機としている⁵³⁾。シノンでの選挙活動のあと
1832年5月バルザックはアングレームのカロー家に滞在したが、同家で地元の
有力者から当選挙区での出馬の意志があるかを問われ、それを肯定したよう
である。立候補のための方策を友人たちに託し、自分はカストリー夫人と会った

めエクス＝レ＝バンに赴いたが、かの地でも、またパリに戻ってからも、選挙のことが終始頭を離れなかったし、それは11月まで続いている。彼の心情、政見を理解して協力を惜しまなかったズルマも、ポムルール氏らと同じく、地方町の政争の烈しさ、醜くさ、複雑さに呆れ、改めて政界入りを断念するよう訴えたのである⁵⁴。彼女の危惧は適中し、バルザックの夢は碎かれた。その代償に「天才は政治家などに身を貶すべきではない」というズルマの最大級の賛辞を得た彼は、神の創造に倣って小説宇宙の構築を企だてるに到るし、その辛い地方体験のエキスを『地方生活場景』の中に移しこむことになる。ズルマ＝カローさえ利用されるのである⁵⁵。

以上述べた1831年から1832年にかけての選挙騒動で窺われるバルザックの挫折の物語は、彼の地方町に対する思い入れが裏切られる一方、その存在は彼の内部でいっそう充実し、増殖し、濃密化してゆき、彼の文学はそれを抜きにして存立し得ないところまで行った、と言えるであろう。

前述のとおり、1829年末のころから1832年半ばまでのバルザックは、新進の人気作家として最もパリ化、上流人化を望み、都雅ぶりに染まりつつあった。この時期の作品に田園美や地方色がとりこまれているのはロマンチズムに風靡されはじめた時代風潮の影響が大きい。しかし、彼の本質の一部になった郷里ツールおよびツーレーヌへの少年的思慕、さらに偶然のことながら、一家の親しい知人たちが各地方に散らばって居住していたことなどが連なって、心理空間の重層化を招いたのである。それはパリの風流人士風に、他として対立する地方人、ことに地方町を揶揄する傾向を示しながら、無意識にしろ、それらを作品構成に不可欠な要素にしてしまっている。『ことづけ』はその象徴ともいえる。いわば、この時期の作品は作家としての青年初期を示している。やがて文学稼業への懷疑と政治への回心が訪れて、この虚から実への転換を可能にする手段として、地方町が現実性をもった存在となった。幻想のヴェールを剥がれた地方町は、これまでの相貌を一変し、文学など寄せつけぬ城壁と門で固め

られていた。この存在との戦いは、バルザックが青年期を突き抜けるための、いわば通過儀礼ともいうべきものであったろう。

『人間喜劇 (La Comédie humaine)』の前身であり、はじめて『地方生活場景』の部門が設立された『19世紀風俗研究 (Etudes de moeurs au XIXe siècle)』の序文に、ダヴァン (Félix Davin, 1807-1836) が記した次の文言は、そのことを示唆する。

『地方生活場景』の使命は、情熱、打算、観念 (idées) が感動 (sensations) および衝動的な動き、心像を現実とみる心理 [すなわち『私生活場景』が描いたもの] にとって代わる局相を表現することにある。20才ではもろもろの感情はおおらかな姿をとって生じ、30才になると、すでに、すべてが値付けられはじめ、人間はエゴイストになる⁵⁶⁾。

この定義は1842年の『人間喜劇』序文にも受けつがれる。つまり1833年までの体験が決定的重みを持ったということになる。われわれは情熱、打算、観念のはたらきの青年に加える猛威を、のちの『老嬢』『幻滅』などの創造人物に象徴的に見がちであるが、その原型は正にバルザックのこの時期の現実であったといえる。

彼に地方町を嫌悪させた原因のひとつは、その退嬰的性格にあり、諸悪の根源もそこにある。同世代人と同じく、18世紀の文明観をもろに受けとり、また特にダイナミックな進化主義を主導的な本質としたバルザックには当然の反応とみてよい。そうした彼であるから、それら既存の地方町とは異なった発展過程を辿る理想的な町の形成をも想像していたのではないだろうか。『田舎医者 (Le Médecin de campagne, 1833)』の主人公ベナシス (Benassis) 医師の診断によれば、彼の村は、

「来年は多分、薬剤師や時計屋や、家具商、本屋などが一軒ずつ来ることになるでしょう。おそらく、この村も小さな町 (petite ville) の格好になり、町住まいの連中 (bourgeois) の家もできるでしょうね。」⁵⁷⁾

自然の恩恵を生かす人智は、富を生み、人口をふやす。村が町になり、荒野が

田園，緑地になる。個人の嗜好にかかわりなく，この進化のベクトルは変化しないであろう。リアリストの理想家であるベナシスにもバルザックにも，それから先の将来像は無意味である。ベナシスが新しくした村は，文化度において幼少年期であったからこそ哺育を必要としたが，町は青年として独立するだろう。彼が最初に見た村が山蔭に自閉的集団として身を寄せ合い，その退化を象徴するかのようなクレチン病蔓延を誘発したのとは異なり，新しい村は健全そのものである。それは生まれるはずの新しい町についてもいえる。自然と文明につねに自分を開き，豊かな生産と文化創造に倦むことがないだろう。この書を刊行するに当ってバルザックは，悲しき地方人ズエルマにこう書き送った。

「これで安んじて死ねると思います，国のために大きな仕事をしたのですから。私の感じでは，この書はかずかずの法律制定とか戦勝とかよりも価値があります。」⁵⁸⁾ 選挙工作の挫折がいわせた言葉であると同時に，彼女をはじめ，彼の抱負を諒として奔走してくれた「地方」の人々に対する謝辞の積りと読みとることでもできる。

それより6年後，再び『田園生活場景』において，新しい村作り，村興しの物語を書き添える。『村の司祭 (Le Curé de village, 1839)』である。それには町としての未来像はない。相変わらず地方町のマイナス面がリモージュ (Limoges) に負わされるばかりである。地方町の現実がバルザックの幻想を完全に断ったのであろうか。そうではなかったようである。彼は，いま有る地方町の改良も可能とみていた。『幻滅』第3部，つまり『地方生活場景』シリーズで実現した最後の作品を終えるに際して，

善をなす (faire du bien) 意図をもって地方 (province) に定住し来たパリ人の改革者 (Parisiens novateurs) が生み出す結果を披露しなければ「地方 (生活場景)」は完成したとはいえないだろう。」

と，眞の最後を飾る作品の性格を示唆している。それはついに実現しなかったが，たとえ彼が試みたとしても，極めて困難な作業になったであろうと思われる⁵⁹⁾。果してその創作欲を刺激する実例があったのかどうかも定かではない。

結局は『田園生活場景』の村々のように架空の町を作り出す他はなかったのではないか。ユートピアがそうした町の形態であったことは確かである。しかし、現実の場を絶対としている『地方生活場景』には許されないことであった。

以上のことは、逆説的ながら地方町に対するバルザックの態度が、彼の一貫して真摯な、同族的関心を示唆し、決して皮相なものではなかったことを立証している。スタンダールやフロベールなどと根本的に違う点である。偽善の町グルノーブルを嫌い、イタリアの町々に陶醉し、自らミラノ人と称したスタンダールと、愛らしい町ツールを愛し、北欧の荒野に点在する町々を見てフランスの町々の幸福を知ったバルザック⁶⁰⁾。シャルル＝ボヴァリーと、女兒を冷酷に突き放したフロベールと、アタナーズを弔うにシュザンヌ『老嬢』を配した人間臭いバルザックを考えてみるとよい。

自ら複雑な人間であることを認めていたバルザックであるが、ひどく軽佻と思える営為のあとには、必らずと云ってよいほど厳肅な面を現わす。『地方生活場景』にもそれがあり、われわれには、彼がバリ作家の顔をみせる時より、まじめな地方人に戻った時のほうを信じたくなるのである。地方の読者に愛されるとすれば、理由はそこにある。『結婚の生理学』に対して『ふくろう党』を書き、その出発点から重層性を発揮したバルザックであったからこそ『地方生活場景』も今日まで読むに耐えるものとなったのであろう。

注

★引用文献名に C. H. とあるは *La Comédie Humaine* (Bibliothèque de la Pléiade: nouvelle édition) を指す。

- 1) これについての論証は、拙論『『地方生活場景』管見』で概略ながらすませた。(九州大学文学部紀要『文学研究』82号：昭和60年：63～93頁)
- 2) 例えばスタンダール、メリメ、ユゴーなど。スタンダール『ローマ、ナポリ、フィレンツェ (*Rome, Naples et Florence*, 1827)』、『パルムの僧院 (*La Chartreuse de Parme*, 1839)』、ユゴー『ライン河 (*Le Rhin*, 1842)』その他多数あり。
- 2') 当時代人の地誌学的関心と、後述する考古学的関心については、Nicole MOZET:

Balzac au pluriel, 1990. pp.96-108. に簡明な紹介がある。

- 3) バルザックは馬車の事故で2回負傷している。1832年5月末には、パリ市内で2輪馬車から転落して頭を打ち、同年8月21日(あるいは22日)、アングレームからエクス=レ=バンに赴く途中、下車するとき、ステップで足に裂傷を負った。これらは『ことづけ』を書いて間もなくのことである。
- 4) 原稿ではツール発であったものを変更している。ここにもパリを特に意識したあとがみえる。バルザックのムーラン行は、当時、同町近くの Bazarnes の館に滞在していた愛人ペルニー夫人を訪ねたのが最初であるが、おそらくパリからであったろう。cf. Nicole MOZET: *L' Introduction de Le Message* (C. H., tom. III, p. 338.)
- 5) 原文は次の通り、《*Durant les premières lieues de la route, …*》《*…notre mutuel amour pour le grand air, pour les riches aspects des pays …*》[C. H., tom. III, p. 395.] なお、訳文は水野亮訳を借用した。岩波文庫版『知られざる傑作他5篇』参照。以下同様である。
- 6) 原文：《*…un poète qui nous eût écoutés de Montargis, à je ne sais plus quel relais, aurait accueilli …*》
- 7) ラブーレ氏は、これらの町村名のなかで唯一つ、ラ=シャリテ (La Charité) が1ページあとに記される「死のことづけ人となるむごい慈悲 (la charité) に対する暗示的役割を果たしているとする。cf. Mireille LABOURET: 《Le Conseil》 et 《Le Message》, *L' Année balzacienne* 1988, p. 114.
- 8) 原文：《*A quelques usages près, les petites villes se ressemblent.*》C. H., tom. III, p. 463. *La Femme abandonnée*. から。
- 9) N. モゼ氏がその代表的存在であろう。拙論もその著, Nicole MOZET: *La ville de province dans l' oeuvre de Balzac*, 1982. に負うところが多い。
- 10) 原文は次のとおりである。《*…une exclamation de Joseph devant les buttes de Chaumont et de Romainville, …*》《*Quel beau paysage ! avait dit Joseph.*》C. H., tom, p. 1453. この文句は、『ことづけ』の《*…les riches aspects des pays que nous découvriions à mesure que la lourde voiture avançait …*》という箇所と同じ道行はじまりの段としての効果を狙っているようである。
- 11) cf. C. H., tom. I, p. 735. なお、バルベリス氏 (Pierre BARBÉRIS) は、シャンブリについて次のように注を入れている《*Chambly est donc en 1822 comme le bout du monde. Balzac a situé à Chambly l' intrigue de Wann-Clore (1822): c' est la première province balzacienne.*》*ibid.*, p. 1469. 訳文は島田実氏『人生の門出』(東京創元社刊『バルザック全集』第22巻) から借用した。以下も同様である。
- 12) *ibid.*, p. 735.
- 13) *ibid.*, p. 799.
- 14) バルベリス氏は、この作品前半の記述について「感情の地誌 (la géographie sentimentale)」と性格づけているが、単なる懐旧の情の発露とは思えない。cf. *L' Introduction d' Un Début dans la vie*. C. H., tom. I, p. 721.
- 15) cf. C. H., tom. V, pp. 694-695. なおリュフェック (Ruffec) は、人口3千程度の町 (ville). 教会の建物が有名。訳文は生島遼一『幻滅』(東京創元社刊『バルザック全集』第12巻) から借用。以下同様。

- 16) *ibid.*, p. 704.
- 17) *ibid.*, p. 705.
- 18) 『ことづけ (Le Message)』は当初 *Le Conseil* の中の第1挿話として書かれたものであったが、1834年に独立させられ、『地方生活場景』に組入れられた。
- 19) C. H. (旧版), tom. XI, p. 340. 参照.
- 20) 例えば『モデスト＝ミニョン (Modeste Mignon, 1844)』には港町ル＝アーヴル (Le Havre) が、『アルシの代議士 (Le Député d'Arcis, 1847) [未完]』ではアルシの町が描かれるが、それらは町自体が問題ではない。また、軍隊駐屯地の町をも描きたかったとも言っており、すでに1831年、簡単なスケッチを試みている。cf. *OEuvre complète de Honoré de Balzac*, [Ed. Comard], tom. XXXIX, pp. 303–304. *Une Charge de dragon*. ただ、どの町を想定しているのか不明であり、町の模様もほとんど描かれていない。
- 21) cf. Champfleury: *Les Souffrances du professeur Deltel*, Ed. J. Rothschild, 1870, p. 3. 引用文は拙訳。以下同様である。フランス近代の地方小町の特徴は、前田愛氏も指摘しているところであり、「おそらく近代の中央集権国家がかつての都市にゆるさされていた特権と自由をつぎつぎにうばいとり、その解体と変質を促進させ云々」という見方をしていいる。『都市空間のなかの文学』(筑摩書房、昭和57年刊) 164ページ参照。また落合直彦『都市の遊楽』には大正9年文部省調査による国民の娯楽は「都市では活動写真、芝居、浪花節の順、地方では相撲、盆踊り、浪花節の順云々」であったことが紹介されている。(宮田登編『都市と田舎』小学館刊、昭和60年(『日本民化大系』第11巻、561ページ) いずれも日本の地方町との共通点が見られて興味深い。
- 22) *ibid.*, p. 4.
- 23) cf. Emile LITTRÉ: *Le Dictionnaire de la langue française*, Gallimard/ Hachette, 1958版, tom. 7, p. 1745.
- 24) ここで「村」と「町」の相違を明確にすべきであろう。リトレ大辞典によれば村 (village) は *lieu non fermé de murailles*, composé principalement de maisons de paysans であり、山野、田園ととけ合ったイメージを持つ。町 (ville) については特殊な用例があり、時に *grande ville* と同じくパリを指すことがある。小町 (petite ville) という熟語も注意を要する。バルザックには《Dans les petites villes qui tiennent le milieu entre les gros bourgs et les villes…》といった例があり、ヌムールをそうした町の1つに入れている。cf. *Ursule Mirouët*, C. H., tom. III, p. 275. また、*petite ville de province* とする場合もあるが、バルザックの造語ではなく、すでにヴォルテールが使用している。リトレ大辞典 *Ville* の項参照。
- 25) 『結婚契約 (Le Contrat du mariage, 1835)』のボルドー (Bordeaux)、『モデスト＝ミニョン』のル＝アーヴルなどがそれである。
- 26) 例えば『人間喜劇』序文に出された人物典型の数、主な登場人物総数、あるいは『結婚の生理学』での不倫に関する要注意の女性の数など。
- 27) これらの人口は筆者の推定である。その根拠は「19世紀ラルース辞典」と「20世紀ラルース辞典」である。各物語の時代に少なくとも15年の開きがあることを考慮し、また郊外区を除いた場合の人口増は多くとも20%~30%程度とみた。ローランサン氏の調べでは、ツールの人口は1801年に21,453人、1851年には23,055人

- となっていて、この50年間は波はあっても上昇はない、という。cf. Michel LAURENCIN: *La vie quotidienne en Touraine au temps de Balzac*, Hachette, 1980. p. 45.
- 28) *Le grand dictionnaire universel du XIXe siècle*, Larousse の各項参照。
- 29) *ibid.*, Ville の項参照。
- 30) 『20世紀ラルース辞典 (Le grand Larousse universel)』参照。
- 31) ランスは当時、人口6万5千～7万の“中都市”で、政、文、教の一中心であり、バルザックの「地方町」の範疇には入らなかったためか、地方小説の舞台とはならなかった。
- 32) 以上のバルザックの足取りなどについては、主としてR. ピエロが作成した Chronologie によって調べたものである。cf. H. de BALZAC: *Correspondance*, I, II, textes réunis, classés et annotés par Roger PIERROT (Ed. Classique Garnier)
- 33) バイユーの町は『二重家庭 (La double Famille, 1830-1842)』の舞台の1つにもなっている。この町は、バリ時代のバルザックが接触した最初の地方町といえる。そのためか、彼の関心はきわめて高く、匿名作家の頃から同町における自作の評判を気にし、妹ロールにその宣伝を頼んだりしている。cf. *ibid.*, tom. I, pp. 97-98, 117, 137, etc. Laure SURVILLE: *Balzac, sa vie et ses oeuvres*, Ed. Librairie Nouvelle, 1858, p. 72.
- 34) 港町云々については、C. H. (旧版), tom. XI, p. 340 を参照のこと。その他については、H. de BALZAC: *Lettres à Madame Hanska*, Editions du Delta, 1968, tom. 2, pp. 269, 272, 286 参照。
- 35) cf. STENDHAL: *OEuvres complètes* (Ed. Cercle du Bibliophile), tom. 16, *Mémoires d'un touriste*, tom. II (1968), pp. 98-110.
- 36) cf. Nicole MOZET: op. cit., p. 266.
- 37) 『地方生活場景』構築の途中経過については、Anne-Marie MEINENGER: *Histoire des Scènes de la vie de province, L'Année balzacienne* 1989, pp. 37-38 に詳説あり。
- 38) cf. Bernard GUYON: *La province dans l'oeuvre romanesque de Balzac, La Province dans le roman*, 1978 (Ed. S. N. E. L. Nantes), p. 120他。ギュイヨンの不満もうなずける点がある。バルザックは『人間喜劇』の目的の1つが「外国人に対して、フランスの最も美しい景観と主要な町々 (les principales villes) について語る」にありと宣言しているが、実際には、いわゆる主要都市はほとんど描かれていないからである。cf. Préface d' *Une Fille d'Eve*, C. H. (旧版), tom. XI, p. 376.
- 39) cf. *OEuvres complètes d'Honoré de Balzac* (Ed. Conard) tom. XL, p. 322. *Lettre sur Littérature*, 1840, 9.
- 40) cf. George SAND: *Questions d'art et de littérature*, *OEuvres complètes de George Sand*, Slatkine, tom. 30, p. 291.
- 41) cf. George SAND: *Lettre à Laure Decerfz*, (1831?), 1, 19 付。但し、この日付は不確定とされる。(Le Courrier balzacien, nouvelle série, No. 10, p. 37参照)
- 42) cf. Bernard GUYON: op. cit., pp. 120-125. なお、このラジオ討論の記録は残っていないようである。
- 43) メタディオエ氏も同様な意見を述べている。彼はツレーヌ人がバルザックを愛好していること、そして、ツレーヌ人は、自分たちの欠点は人間一般のそれであるとわり切っており、むしろバルザックによって地元が天下に知られたことをよ

- ろこんでいる、と言う。cf. Paul MÉTADIER: *Balzac en Touraine*, Hachette, 1968, p. 38. なお、バルザックの地方小説の成功は、地方町民に対する「おもねり」によるものだとする考え方は、サント＝ブーヴ以来根強く続いていたようであるが、ブルーストはそれを卑劣な批判ときめつけている、cf. Marcel PROUST: *Le Balzac de Monsieur de Guermantes*, Ed. Ides et Calendes, 1950版, p. 109.
- 44) cf. Ed. Conard, op. cit, tom. XXXIX, p. 82.
- 45) cf. Bernard GUYON: *La Pensée politique et sociale de Balzac*, Ed. A. Colin, 1967, p. 381.
- 46) 地方人の現在の政治意識では、自分が受け入れられるのは困難と見越してはいたようである。事実、友人たちの尽力も空しかった。
- 47) cf. *Correspondance* (op. cit.) tom. I, p. 516.
- 48) *ibid.*, p. 532.
- 49) *ibid.*, pp. 599–600. これはカンブレーの S.-H. Berthoud の1831年10月の書簡。
- 50) *ibid.*, p. 728. サッシュェの Jean de Margonne より, 1832年5月付, 因みに1833年ツール地区における中央新聞購読数は約1,100部。cf. M. Laurencin: op. cit., p. 267.
- 51) *ibid.*, p. 599. プザンソンの Charles de Bernard より。1831年10月。
- 52) cf. *Correspondance* (op. cit.) p. 545–547, etc.
- 53) *ibid.*, p. 711, etc.
- 54) 以上、アングレームでの選挙運動については, *Correspondance* II, pp. 65–178. を参照。特に nos, 502, 526, 535, 536, 542, 545, 558.
- 55) *ibid.*, tom. II, pp. 360–361. ズルマは田舎才女のモデルとして『幻滅』や『いなかミュージ』の女主人公の造型に役立っている。
- 56) cf. C. H. (旧版), tom. XI, p. 224.
- 57) cf. C. H., tom. IX, p. 426.
- 58) cf. *Correspondance*, tom. II, p. 355.
- 59) cf. C. H. (旧版), tom. XI, p. 341. Préface de David Séchard. 『田舎医者』におけるペナシス医師のような人物を想定しているのであろうが、町と村では住民の性格が違ふ。それはバルザック自身がだれよりもよく知っていたことであり、人は彼によって教えられ、また再確認させられるのである。E. ファゲは、自分の体験からして、バルザックの示す真実を再認識し、①地方人は、本がパリで出版されるというので本を買って読もうとしないこと、②パリから治療を受けにきた患者には、前にかかったパリの医者がたとえ名医であっても、無知な山師だと悪口して、彼とは逆の治療をすること。③パリで成功した者が地元に戻ってくると悪くみられること、などを挙げている。半世紀たっても地方町は変わっていないのである。「地方町に貢献するパリ人」とは彼自身の希望の姿であろう。とすると、バルザックは、どんなにしても地方町への愛着を断ちきれなかった、といえる。cf. Emile FAGUET: *Balzac*, Hachette, 1913, p. 57.
- 60) cf. Ed. Conard, op. cit., tom. XL, p. 674. *Lettre sur Kiev*, 1847.